

第 137 回北信越地区高等学校野球大会指導者研修報告

長野県長野西高等学校 丸山 晃実

1. はじめに

今回、第 137 回北信越地区高等学校野球大会の研修の機会をいただき、10月13~15日の3日間の日程で福井県に行かせていただきました。各県を勝ち抜いた高校同士のレベルの高い試合を、佐藤和也監督（元新潟明訓高校監督）、小林善一先生のお話を聞きながら、また本研修の参加者の先生と意見を交えながら観戦させていただきました。その中で学んだこと、感じたことを報告させていただきます。

2. 試合観戦

本研修では以下の4試合を観戦させていただきました。

10月14日（土）1回戦

①北越（新潟） - 日本ウェルネス（長野）

福井県営球場 第1試合 9:04~10:50 所要 1時間46分

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計	H	E
日本ウェルネス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1
北越	0	0	3	1	0	0	1	0	×	5	6	1

（ウ）高山・市川・板倉 - 内藤

（北）片桐・幸田・大野 - 堀口

この試合を観戦しながら、佐藤監督のお話を聞く中で、「秋の大会」と「左利き」について学ぶことが沢山ありました。秋の大会では簡単なミスが起こりやすい、実際このゲームでも牽制球や捕手の送球がそれたり、一塁ベースカバーでのミスなど、もったいないと思われるミスが失点につながっていた。夏に比べ秋は予想外のプレーが起きやすいと思う。そのようなことを未然に防ぐため、指導者があらゆるプレーを予測し、練習をしなければならないと感じた。

この試合では中盤に北越の左投手が好投を見せた。その中で左投手対左打者について佐藤監督からお話をいただいた。左投手が有利であるといわれているが、私は1塁に走る動作による影響であると考えていた。しかし、体の構造や、生活による影響も関わっていることを知った。体の回転のしやすさや、眼の使い方など、今まで考えたことのなかったことが原因にあり、指導者として、自身が学ぶ姿勢を持ち続けなければならないと思った。

②坂井（福井） - 佐久長聖（長野）

フェニックス 第2試合 11:54~13:51 所要 1時間57分

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計	H	E
佐久長聖	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4	1
坂井	0	0	0	0	0	0	1	0	1×	2	4	0

（佐）林 - 小山

（坂）嶋田 - 石川

1球1球に熱がこもる大変見応えのある1試合でした。その中でも7回表の坂井高校の守備が印象に残っている。

2死1、3塁、6番打者を迎えた場面で、坂井高校は6番打者を歩かせ7番打者との勝負を選択したと思われる。6番を歩かせる場面で外角にボールを3球続けた。そのまま歩かせるのだろうと思ったが、その次の1球はキャッチャーがインコースに構えた。結果は死球になったが、次の打者に対して使う球の練習をしたのだと思う。満塁になり7番との勝負では、インコースを攻めたが死球の押し出しとなった。しかし、そのプレーで選手の雰囲気が悪くなることはなく、次打者をしっかり押さえると、むしろ良くなったように感じた。その結果7回裏の1点につながったのかもしれない。

6番打者の4球目から7番打者との勝負、チームがそのプレーを共有しているからこそ、結果に対して納得ができ、試合の流れをつかむことにつながったのだと感じた。また、そのプレーを演出したのは監督の指示か選手の判断かはわからないが、私は捕手の判断であると思っている。捕手がどのようにしてゲームを動かすのか、またそのような捕手をどう育てていくのかということを考えさせられました。

③日本文理（新潟） - 福井工大福井（福井）

福井県営球場 第3試合 13:54~16:14 所要 2時間20分

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計	H	E
日本文理	0	0	3	0	0	0	0	0	3	6	11	2
工大福井	1	0	1	0	2	0	0	0	0	4	7	0

〈日〉新谷 - 坂井

〈福〉武盛・山崎 - 竹橋・二宮

【本】高原〈福〉 = 大会2号

終盤の日本文理高校の攻撃が印象に残る試合でした。1点差の9回の表、1死1塁から2番打者が死球を選ぶ。野手がマウンドに集まろうとした際に3塁ベースが空き走者がそのまま3塁をとる、という場面があった。守備側がタイムを取る場面、タイムのかかるタイミングのずれを狙った素晴らしい走塁だった。また、ゲームの流れ手繰り寄せる大きな走塁だったと思う。普段から練習をしているプレーではあると思うが、自信や経験がなければ、終盤の1番大事なところでなかなかできるものではないと思う。練習に対する意識や姿勢が、そのまま出ている走塁だったのではないかと思う。

大会の1番大事な場面でできるプレーにするためには、普段の練習や練習試合で繰り返し、選手が自信を持てるようになるまでやる必要があると思い、指導者として、徹底して行えるよう努力したい。

10月15日（日）2回戦

北越（新潟） - 星陵（石川）

福井県営球場 第1試合 9:47~13:15 所要 3時間28分

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	計	H	E
星 陵	1	0	0	2	0	0	0	1	0	0	1	2	7	19	0
北 越	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	5	15	2

〈星〉奥川・河村・山口・佐藤 - 山瀬

延長12回

〈北〉幸田・大野・片桐 - 堀口

北越高校が粘りを見せ、延長 12 回まで戦う熱戦でした。この試合では終盤の戦い方について考えを深めることができた。残りのイニングと点差、相手の投手起用からどのように戦うか考える。また、それを選手と共有することができ、チームが一貫性を持つことができるかが大事である。バッテリーの配球と野手のポジションが合っていないことや、投球に焦りがでてしまうことは多々あると思う。また、ベンチが焦り試合を有利に進められなくなる場合もある。指導者として自身をコントロールすること、終盤でブレのない試合運びができるチームにすること、またそのために必要なことを学んでいく必要があると思った。

3. まとめ

4 試合を観戦し、それぞれの試合から感じたことがあるが、共通していることもあった。特に感じたことが「投手力の高さ」である。140km/h に近いボールを投げる投手が多いこと、もしくは 130km/h 程度だが、コントロールの精度が高くキレのある変化球を持っている投手であった。1 年生ながら 140/h 近いボールを投げる投手もおり感心させられた。

各県を勝ち抜いて出場するチームはやはり、個々の投げる、打つ、守るといった能力が非常に高かったと思う。しかし、それだけではなく、それぞれのプレーの中で、考え方のレベルが高いと感じさせることや、チームのまとめ方に感心させられた場面がいくつもあった。

今回の研修では、試合を観戦するだけでなく、諸先生方と意見交換をする機会があり、大変学ぶことが多くとても有意義なものになりました。諸先生方と同じ試合を観戦したが、私に見えていることはまだまだ未熟であると痛感させられました。指導者としての「見る眼」を養うことを、今後意識していかなければならないと思う。また、研修で学んだことや感じたことがより価値の高いものになるよう、生徒に還元することや、勉強し知識を増やすことや考え方を深めることに励みたいと思う。

最後になりますが今回、このような研修の機会を与えてくださった、長野県高校野球連盟の方々に心から感謝申し上げます。また、講師として様々なアドバイスをしてくださいました佐藤和也監督、研修期間中に世話人として同行してくださいました小林善一先生には、大変お世話になりました。ありがとうございました。

第137回北信越地区高等学校野球大会指導者研修報告

小海高等学校 野溝 俊太郎

1 はじめに

今回、北信越地区高等学校野球大会指導者研修参加の機会を頂き、平成29年10月13日(金)～10月15日(日)の3日間にわたり福井県に行かせて頂きました。複数の先生方との研修でしたので、多角的な視点での野球を学ぶことができ、大変有意義な研修となりました。今回の研修にて学んだこと、感じたことを報告させていただきます。

2 第1日目(10月13日 移動日)

福井県までの道のりは遠きものであったが、その分、車中にて各先生方との会話を多く持つことができ、学ばせてもらった。特に小林善一先生の近年甲子園における内角に関する考え方の話が最も印象的であった。また、松本蟻ヶ崎高校の市川先生におかれましては、3日間にわたる長時間の運転、誠にありがとうございました。

3 第2日目(10月14日 試合観戦)

①【福井県営球場 第一試合 日本ウェルネス 対 北越】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
日本ウェルネス 信州筑北(長野1位)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北越(新潟3位)	0	0	3	1	0	0	1	0	×	5

福井県営球場



試合巧者ぶりを発揮し秋季長野県大会を初制覇した日本ウェルネスが、どのように試合を運んでいくのかを注目していた。初回、日本ウェルネスの攻撃で、2死3塁から4番打者がカウント1-0(1ボール0ストライク)からセーフティーバントを試みていた。長野県大会でも4番打者に初球スクイズを行った試合もあり、バントをからめた日本ウェルネスらしい攻撃だった。特に新チーム間もない秋の大会では、守備の連携完成度が未熟なチームが多いため、バントを活用した戦術は有効性が高いものであると感じた。初回裏、北越の3番打者の打球が日本ウェルネス高山投手を直撃した。この出来事が影響してか、3回に5四死球を与えて降板し、1年生の救援投手はそれなりに踏ん張ったが、以降日本ウェルネスは流れをつかめずに敗退した。長野県大会で大車輪の活躍をした高山投手の降板が試合の大きなポイントであったが、今年の夏の甲子園で勝ち上がった多くの学校がそうであったように、信頼できる投手が複数いることは、今回のような事態への一つの対応策としても効果的であると考えられる。勝利した北越高校は、1安打無失点の先発投手を4回から迷わず代え、こ

の代えた投手も1安打無失点に抑えていたが、8回からさらに別の投手への継投を行った。途中から同行させて頂いた、新潟医療福祉大学硬式野球部と福井フェニックススタジアムで試合が行われ、かなり交代する継投と、事前予定のイニングできっちり代える継投の両方を経験し、考えるべき点を教えて頂いた。この試合は、現代高校野球における、複数回交代して考えさせられた試合であった。

福井フェニックススタジアム



②【福井フェニックススタジアム 第二試合 坂井 対 佐久長聖】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
坂井(福井2位)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
佐久長聖(長野2位)	0	0	0	0	0	0	1	0	1×	2

息詰まる投手戦を演出したのは両チームの捕手であった。内外にきっちり投げ分けられる両投手もさることながら、打者の前打席結果を踏まえた配球やキャッチング技術の高さは目を見張るものがあった。この試合では、日頃から築き上げた自分たちのスタイルを信じ貫徹させることが強さになることを学んだ。それを感じたシーンが7回の攻防である。長聖の攻撃、2死1・3塁の場面で、坂井は6番堀北を歩かせ満塁策を選択した。この時、外に3球外した後、坂井の捕手石川は4球目を内角に要求したのだ。それが結果として死球となってしまった。これは7番小山への内角攻めを見越しての要求と推察される。結果、続く小山へも死球を与えて1点を献上してしまふ。しかし、次の8番打者への初球も迷わず内角を要求し、そこへ投手も投げ込んでいた。死球を与えてしまった両シーンでも、坂井の選手達は全く動じている様子はなく、集中して試合に臨んでいた。これは、自分たちのスタイルによるものだから仕方がないと割り切れる程に、日頃からチームとしてのスタイルを確立しているからだと思う。だからこそ、瓦解することなく、最後まで長聖を最少失点に抑えることができたのだと思う。また、私はすぐに気づけなかったが、同行した先生方は先制後の7回裏投球練習時に、長聖林投手のフォームがこれまでと異なっている点にいち早く気づいていらっしやった点も、自分の未熟さを痛感し、研鑽を積まなければと自省した場面であった。

③【福井県営球場 第三試合 日本文理 対 福井工大福井】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
日本文理(新潟1位)	0	0	3	0	0	0	0	0	3	6
工大福井(福井3位)	1	0	1	0	2	0	0	0	0	4

3回表の攻撃途中から観戦した。日本文理は新チーム結成後無敗というだけあり、どの選手も体が大きく、エースの新谷選手は力のある球を投げ込んでいた。両チームに限らず、北信越大会出場多くのチームが、ランナーが出塁すると、そのランナーが揺さぶりや走りのような雰囲気を出しバッテリーを動揺させようとしており、そういった基本的な点も徹底できていた。工大福井は左打者が多めであるためバント攻撃を磨いているのか、セーフティー

バントなどの試みも多く見られた。3回裏1死1塁で、初回に先頭打者本塁打を打った左の1番打者がサード側へセーフティーバントを行い、サードの暴投を誘いランナー1・3塁。続く2番がセーフテースクイズを行い守備陣のベースカバーが遅れて1点を奪った。試合終盤での打順がどのバッター「から」か、もしくは、「まで」なのかを見越しての試合運びも必要であると学んだ。8回表日本文理の攻撃で2死ランナーなしから7番、8番が出塁して、9回の攻撃が1番から始まる粘りは大きかった。9回表の攻撃でこの1番打者が出塁し、続く2番が四球で出塁時にファーストランナーが隙を突いて3塁まで進塁し、大量得点のきっかけを作った。常に粘りは選手へ求める要素であるが、「ここぞ」を選手へ意識させるのが監督の役割として必要である。

4 第3日目(10月15日 試合観戦及び移動日)

①【福井県営球場 第一試合 星稜対北越】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
星稜(石川1位)	1	0	0	2	0	0	0	1	0	0	1	2	7
北越(新潟3位)	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	5

試合前半は降雨かつ強風の中で実施されたため、同行された先生方からこういった環境下における準備として必要な事柄の話聞き勉強になった。選抜甲子園がかかるベスト4をかけての試合であるが、1年生スタメンが星稜は4人、北越は5人おり、両校1年生投手が先発であることから、層の厚さが感じられた。北越の先発左腕は再三ランナーを出すも牽制球でランナーをアウトにしてチャンスをつぶしていた。球威がなくとも、牽制技術が長けているだけでも十分戦力として貢献できるいい例であった。対する星稜も度重なる牽制死に対応すべく、4回表にランナー出塁時、一塁ランナーはベースから離れずリードを取らないことで牽制死にならぬよう工夫していた。北越の左腕は8回表の牽制時にボークを取られた所から大きく崩れてしまった。北越は終盤に粘りはしたが、23出塁ながら17残塁とチャンスで決定打が出ず、昨日の日本ウェルネス戦のように機動力も発揮できなかった。

5 まとめ

今回の4試合を観戦して、走攻守いずれもある一定のレベルに達しているものはもちろんであるが、結局は多くミスをした方(チャンスをもものにできなかった方)が勝敗を決していた。だからこそ、いかに日頃からカバーリングや体作り、コーナーをつく投球や力強いスイングを意識して行っているかが大切であるとも感じた。誰もが知る野球の基本の「き」を多様なアプローチで徹底して鍛錬しているかだ。また、今回の研修では日頃話せないような長野県高野連の先生方をはじめ、多くの先生方との野球に関する会話ができたと大きな学びとなった。プレイが発生した後に色々と解説することは誰にでもできるが、今回同行させて頂

いた各先生ともにプレイが発生する前にプレイを予測し、それがその予測通り発生する事が多々あった。これは各先生方ともに、ただ漠然と高校野球に携わってきたのではなく、五感を鋭敏化して携わってきた経験の賜物であり、私もこうなりたいと強く感じた。

この上なく充実した研修を設けて頂いた長野県高校野球連盟の諸先生方と、同行して頂いた小林先生をはじめとした先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

第137回北信越地区高等学校野球大会指導者研修報告

松本蟻ヶ崎高等学校
野球部顧問 市川 優一

1. はじめに

この度、私は第137回北信越地区高等学校野球大会指導者研修へ参加させて頂き、たくさんの刺激を受けました。大会期間中の多忙な中、長野県高校野球連盟を始めとした関係の先生方にはこのような機会を設けて頂き、とても感謝しています。

この報告書は試合観戦を通しての感想に留まらず、研修に同行して頂いた小林善一先生と現地で同じ試合を観戦して頂いた佐藤和也先生のお二人からの貴重な助言や野球への情熱を通して、私が感じたことを少しでも形にしておきたいという想いを持って書きました。研修内容への感じ方は参加者によって多少異なると思いますので、野溝先生、丸山先生の報告書も参照して頂けたらと思います。

2. 研修概要

日 時：10月13日（金）～10月15日（日）
場 所：福井県（福井県営球場・福井フェニックススタジアム）
講 師：小林善一先生（長野県高等学校野球連盟元会長）
佐藤和也先生（元新潟明訓高等学校野球部監督）
参加者：丸山晃実（長野西高等学校野球部顧問）
野溝俊太郎（小海高等学校野球部監督）
市川優一（松本蟻ヶ崎高等学校野球部顧問）

3. 試合を通して

○10月14日（土）

第一試合（福井県営球場）

日本ウエルネス高等学校筑北キャンパス vs 北越高等学校

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
ウエルネス(長野1位)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北越(新潟3位)	0	0	3	1	0	0	1	0	×	5

長野県大会優勝校が北信越大会でどのような試合をするのか、とても楽しみにしていました。シートノックを見る限り、ウエルネスはボールさばきが丁寧で送球も高めに浮くことが少なく、何より球際の集中力があり、鍛えられている印象を持ちました。しか

し、試合はウエルネスの主戦、高山君が6四死球を与えて3回途中で降板してしまい、終始北越のペースで行われました。直球・変化球共に抜けた球と高めの球が多く、長野県大会でみせた制球力と粘りが発揮されなかったのは、初回到打球を体に受けた影響もあったのかもしれませんが。対照的に北越は右の片桐君、左の幸田君、右の大野君が完封リレーをみせ、特に幸田君は身長169cmと体格的には決して恵まれておらず、球速はほとんど120キロ台ながら、腕が遅れて出てくるフォームと緩急で打者のタイミングを上手に外していました。ブルペンでの投球練習を見ただけでは目を引く投手では無いかもしれませんが、やはり実践で起用してみて初めてその選手の特徴が現れることを再認識しました。

第二試合（福井フェニックススタジアム）

佐久長聖高等学校 vs 福井県立坂井高等学校

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
佐久長聖(長野2位)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
坂井(新潟2位)	0	0	0	0	0	0	1	0	1×	2

この試合では両校の先発投手が引き締まった投手戦をみせてくれました。佐久長聖先発の林君は直球、変化球共に制球があり、特に直球のキレが素晴らしく、6回終了まで1人のランナーを出さない完璧な投球でした。対する坂井の先発嶋田君は、右のサイドスローで球速は平均的ながら内外角への制球が良く、それを捕手が上手にリードしながら長聖打線を押さえていました。試合が動いたのは7回で、2死満塁から押し出し死球で長聖が1点を先制しましたが、その裏、林君は先頭打者へ四球を与え、2死から4番打者に3塁打を打たれて同点に、9回には1死からセンターへの安打→バント悪送球→四球で満塁にし、最後はライト前に落ちる安打で坂井がサヨナラ勝ちを収めました。試合の流れが選手の精神状態に影響を与える事は十分認識していたつもりでしたが、その怖さを改めて感じるとともに、それを試合の中で修正していく術を持つことが必要であることも感じました。また、坂井からは個の力だけに頼るのではなく、チームとして共通認識をもってプレーする姿勢を感じることが出来ました。7回裏に押し出しで先制を許した場面も普通であれば気落ちするところですが、失点するまでの課程で最善を尽くしており、その失点はチーム全体が納得出来る内容だったため、直ぐに切り替えてプレーしていたように思います。大変勉強になる試合でした。

第三試合（福井県営球場）

日本文理高等学校 vs 福井工業大学附属福井高等学校

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
日本文理(新潟1位)	0	0	3	0	0	0	0	0	3	6
工大福井(福井3位)	1	0	1	0	2	0	0	0	0	4

再び福井県営球場へ戻って観戦しました。シートノックに入る際、佐藤先生から「シートノックを見ながら打順を予想すると目を肥やすことに繋がる。」と教えて頂きました。これまでもシートノックを見ながら野手の動きや肩の強さ、ダッシュ力や送球の正確性などをチェックしていましたが、守備から打順を予想するという事はしたことが無かったので、とても新鮮に感じました。私は「スピードがありそうなので1、2番かな。」「守備能力は高そうに見えないので打撃優先で使ってもらっているだろうから中軸かな。」という程度の考え方でしたが、佐藤先生は「この選手は手足が長いから内角に弱点がありそう。中軸は厳しいので7番くらいかな。」と予想し、見事に言い当てていました。予想が的中したことはもちろんですが、あらゆる事柄を予想の材料としていることに驚き、自分に「当たり前」になっている事を疑い、顧みる事は進歩するために不可欠なのだと感じました。さて、試合は4対3のまま9回を迎え、日本文理が一気に3点を奪って逆転勝ちをおさめました。

○10月15日（日）

第一試合（福井県営球場）

星陵高等学校 vs 北越高等学校

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
星陵(石川1位)	1	0	0	2	0	0	0	1	0
北越(新潟3位)	0	1	0	0	0	0	0	2	1

	10	11	12	計
星陵(石川1位)	0	1	2	7
北越(新潟3位)	0	1	0	5

連戦となった北越の先発は片桐君ではなく、前日に最も長いイニングを投げた左腕の幸田君でした。初回、サードへのセーフティーバントと長打で星陵が1点を先制する展開で始まりました。幸田君は連投の影響なのか腕が振れておらず、打者とのタイミングが合う場面が昨日より多かったです。また、北信越大会を観戦する中で、セーフティーバントを仕掛ける打者が多い印象を受けました。北信越大会に出場するチームの投手からヒッティングだけでは得点が難しいことが理由として考えられますが、選手達が相手の守備をよく観察している事もあると思います。指導者から選手に指示を送ることは可

能ですが、1つ1つの判断は選手がしていかななくてはなりません。そうした意味で、相手を見て攻撃の選択を出来るというのは試合に適応する力がついている選手が多いと言えるかもしれません。そういう力を高めていかなければ、体力や技術がついても勝ち切る事は難しいのだと思いました。また、2回には北越が1・3塁から盗塁を仕掛けた際、星陵の捕手の送球を投手が弾いてしまい、その間に同点に追いつくという場面がありました。投手がとる予定だったのだと思いますし、それを選手達は分かっていたはずですが、「分かっている」と「出来る」の間には大きな壁があるのだと感じました。さて、北越先発の幸田君ですが、牽制が巧みで1塁ランナーをいくつもアウトにしています。佐藤先生いわく「ベースとなる牽制を1つ持って、それを軸にパターンを変えているのでは。」とのことでした。前述した通り、絶対的なボールがある訳ではないですが自分の特徴を熟知して、投球以外の部分にも注目して投手としてのトータルレベルを高めている幸田君は本当に頭の良い選手だと感じました。試合は終盤、北越が粘りをみせながら、最後は地力で勝る星陵が北越を振り切った試合でした。

4. まとめ

この研修を通して本当に多くの勉強をさせて頂き、また、たくさんの刺激を受けることができました。観戦レポートの中で佐藤先生から頂いたコメントをいくつか載せてありますが、これ以外にも多くの助言を頂きました。佐藤先生と試合を観戦させて頂いて感じることは、試合の展開を読む感性がとても鋭いということです。相手選手の特徴、自軍選手の状態、天候、イニング、点差などから試合展開を読むことは誰もがやっていることですが、佐藤先生は情報を集める力が高いことはもちろん、得られた情報から最善でシンプルな答えを導き出しているという印象を持ちました。そうした力がどうやったら身につくのかは分かりませんが、その答えは自分で探さなくてはいけないのだと思います。

また、小林先生からは試合中だけでなく、移動中の車内でも多くの助言を頂きました。特に甲子園のようなレベルの高い大会を間近で観て感じたことを教えて頂いたことで、私が当たり前と思っていたレベルとのギャップを痛感しました。また、小林先生は高校野球の第一線で長く指導された実績をお持ちでありながら、とても貪欲に野球を知ろうとしているように感じました。自分の甘さを感じると共に、気を引き締め直すことができました。

最後にこのような機会を与えて頂いた長野県高校野球連盟の皆様には心から感謝申し上げます。今後も高校野球の指導者として貢献出来るよう、努力していきたいと思っております。ありがとうございました。